

(鹿児島市魚見町103-1)

位置と環境

鹿児島湾を見下ろす標高約60mのシラス台地上に位置する。現在の海岸線までは約1kmである。

調査の経緯

平成11(1998)年に地方職員共済組合職員住宅建設に伴い、県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺構と遺物

縄文時代・弥生時代・古代・近世の複合遺跡であるが、主体となるのは弥生時代前期末から中期初頭である。

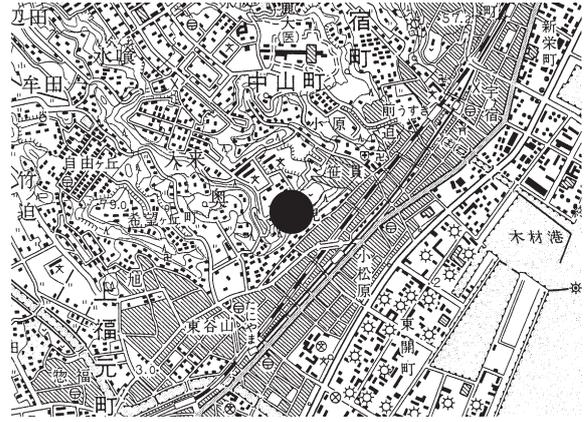
縄文時代は後期(指宿式土器・市来式土器)、晩期(上加世田式土器・刻目突帯文土器)の土器が出土しているのをはじめ、石鏃・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石などの石器も出土した。

弥生時代は前期末を中心に中期の資料も出土した。遺構は竪穴住居跡(前期:3軒,中期:1軒)と土坑(約80基)、焼土、道跡と考えられる溝状遺構等が検出された。

前期該当の竪穴住居跡は、直径がいずれも3~3.6m、深さが15~25cmで、平面形が円形を呈するものであった。このうちの2軒は、壁際を除いて床面が硬化しており、中央に長軸約1m、短軸約70cmの不定形、あるいは直径約45cmの円形土坑がある。後者の円形土坑は中央に深い小ピット1と両サイドにそれぞれ小ピットが1つずつみられるものである。3軒ともに柱穴は明瞭でなかった。



写真1 魚見ヶ原遺跡全景



第1図 魚見ヶ原遺跡の位置

中期該当の竪穴住居跡は、平面形が長方形(3m×4m)で、深さが30~45cmを呈するもので、中央部を中心に床面が硬化しており、壁際沿いに直径20~60cmの柱穴状ピットが8、中央部に直径15cmの小ピットがみられた。

土坑は約80基が検出された。これらは形態や内容から大きく4つのタイプ(A~D)に分類できる。

Aタイプは方形を基調とするもので、一辺が約2mの正方形を呈するものと、それよりやや小型で長方形を呈するもので、いずれも多くは遺物が含まれる。

Bタイプは平面形が略楕円形(長軸約1.8m、短軸1.3m)を呈するもので土坑6がこれに該当する。この土坑からは、土器片・石器の剥片・炭化した木の実・ウミニナの貝殻などとともに焼土も入っていた。

Cタイプは平面形が卵形および隅丸長方形を呈し、断面形がやや袋状になるもので、ほかの土坑と比較して70~120cmと深い。これらの中には底面に小ピットをもつタイプや、炭化木の実の集中出土域から検出されたものなどがあつた。

Dタイプは平面形が卵形を呈し、長軸100cm・短軸60cmを測る小型の土坑である。10数基集中する中で、唯一調査された土坑38からは、器壁の非常に薄い小型壺形土器が出土していることから、墓坑的な性格も考えられる。

土色が黄橙色に変色した焼土が6か所検出された。いずれも直径60~80cmですり鉢状の窪みをもつもので、深さ10~20cmと浅い。炭化木片が出土したもの

もあった。

調査区南側の谷へ傾斜していく区域では、幅約1m前後の溝状遺構が長さ約20mにわたって検出された。底面には幅30～50cmの硬化面がみられることから、道跡と考えられる。

弥生時代前期から中期にかけての土器には、甕形土器・壺形土器・蓋形土器・高坏形土器などがある。石器には、打製石鏃・磨製石鏃・打製石槍状石器・石匙・石錐・磨製石斧・打製石斧・石庖丁・磨石・石皿などがある。特に打製石鏃は100点以上出土した。このほかに軽石加工品や鉄片、炭化した木の

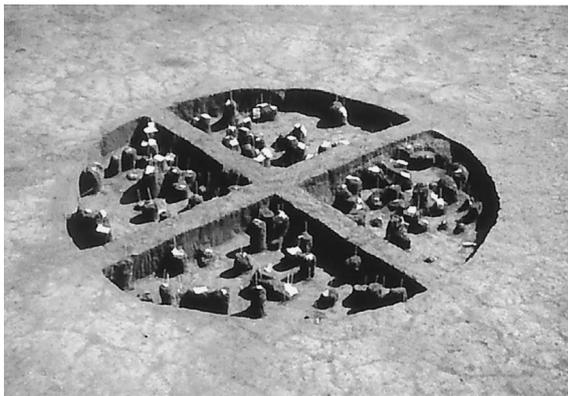


写真2 竪穴住居跡

実・種子、貝殻（ウミニナ）などの自然遺物も出土している。

そのほか古代以降のものとして、溝状遺構や土師器・須恵器・青磁・銭貨・土錘などが出土している。

特徴

- ・県内では発見例の少ない弥生時代前期末を中心とした集落跡である。
- ・遺跡は住居跡や土坑など、多数の遺構で構成されており、当時の様相を知る上で注目される。
- ・土器の分類によって弥生時代前期から中期にかけての土器編年が可能となる。

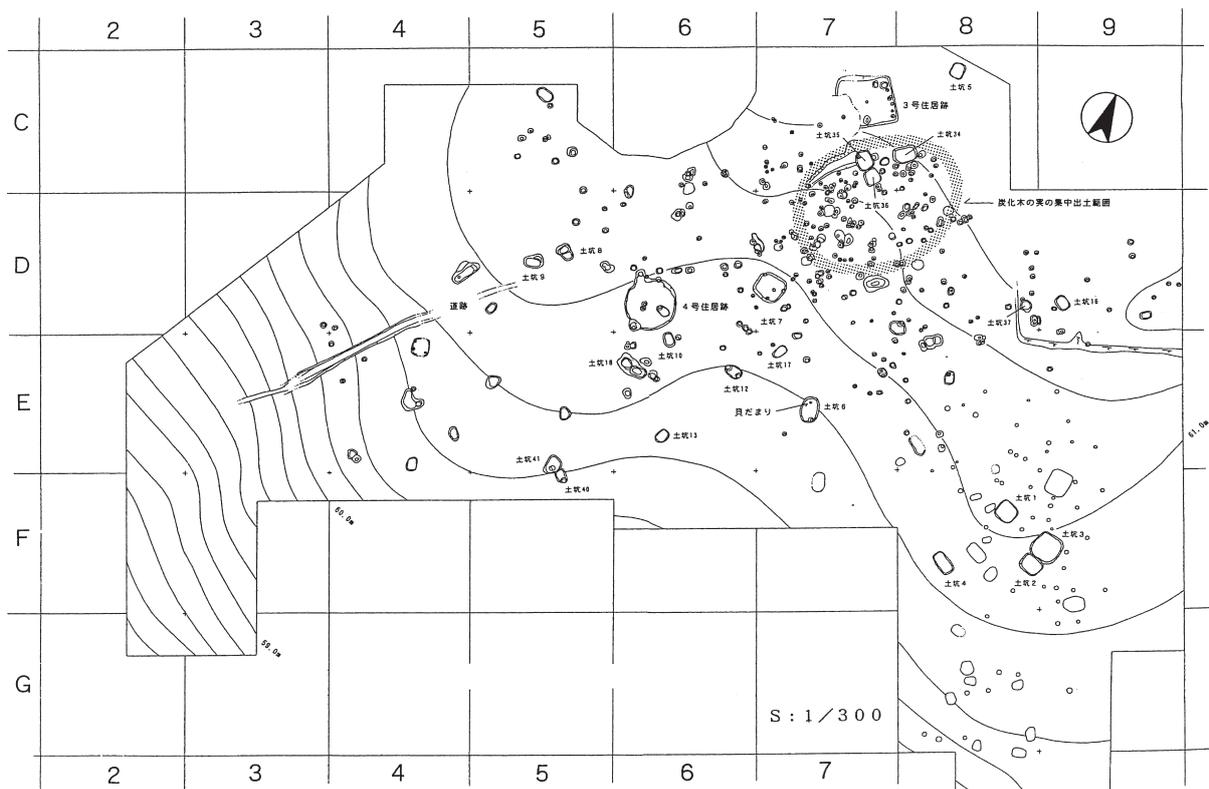
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

前迫亮一・桑波田武志1999「鹿児島市魚見ヶ原遺跡発掘調査速報」『第11回人類史研究会発表要旨』人類史研究会

(前迫亮一)



第2図 遺構配置図